

健康人肋膜腔液中遊離細胞知見補遺

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31142

健康人肋膜腔液中遊離細胞知見補遺

(昭和四年二月五日受附)

金澤醫科大學山田内科教室(主任山田教授)

高橋實
經田忠作

目次

- 一、緒言
 - 二、健康者肋膜腔液中遊離細胞數
 - 一、實驗方法
 - 二、實驗成績並考案
 - 三、「オキシダーゼ」反應
 - 四、健康者肋膜腔液中遊離細胞ノ形態ニ就テ
 - 一、實驗方法
 - 二、實驗成績並考案
 - 三、肋膜被覆細胞
 - 四、大單核様細胞
 - 五、不完全ナル細胞
 - 六、淋巴球
 - 七、多核形白血球
-
- 二、實驗成績並考案
 - (一) 肋膜被覆細胞
 - (二) 大單核様細胞
 - (三) 不完全ナル細胞
 - (四) 淋巴球
 - (五) 多核形白血球
 - 五、總括
 - 六、文獻

一、緒言

曩ニ小川氏ガ健康者ニ於テモ胸膜腔穿刺ニヨリテ一定量ノ液体ヲ穿刺抽出シ得ルコトヲ報告セシヨリ之ガ病的産出物ナル哉將亦生理的ニ存在スル液体ナル哉ハ疑問トセララル、所トナリ、之ガ研究旺盛トナルニ至リ其ノ研究報告セラレタル所又少シトセズ。然シテ之ガ研究ノ一分野トシテ種々ナル液体中ニ遊離存在スル細胞ノ研索セララルハ當然ニシテ斯ル研索ハ病理學上及診斷學上甚ダ興味アル問題トセラレ之ガ研究報告モ亦少ナカラズ。

余等ハ幸ニ步兵第七聯隊ノ好意ニヨリ兵士ヨリ得タル所謂健康体肋膜腔液ニ就キ該液中ニ遊離存在セル細胞ノ數並ニ之等細胞ノ形態ヲ觀察スルコトヲ得タリ。依ツテ之ヲ茲ニ記載スル所アラムトス。

二、健康者肋膜腔液中遊離細胞數

一、實驗方法

材料ハ健康兵士ヨリ得タルモノニシテ、兵士ガ兵營内ニ於テ種々ナル体働ヲ成セル後、或ハ教練ヲ行ヒ歸營後後腋窩線ニ於テ第七乃至第九肋間ヲ五託ノ注射器ニテ穿刺抽出セル液体ニシテ(三五・六%陽性率)之ヲ豫メ清拭セル載物硝子上ニ數滴々下シ之ヲ「メランシール」ニ割度マデ吸入シ更ニチュルク氏液ニテ十倍ニ稀釋シトーマツアイスノ血球計算器ニテ型ノ如ク

算定セリ。之ニ使用セル注射器ハ嚴格ニ乾熱滅菌シ穿刺局部ハ沃度丁幾及酒精ニテ清拭シ凡テ無菌的ナラシムルコトニ最善ノ注意ヲ拂ヒタルハ言テ俟タズ。

尙穿刺液ニ血液ノ混入セルモノハ之ヲ省キ亦極メテ微量ニシテ泡沫狀ヲ呈セルモノハ省略セリ。

二、實驗成績並考案

余等ハ一六例ニ就テ前述セル方法ニヨリテ算定セルニ第一表ニ見ルガ如キ成績ヲ得タリ、即チ最小一七〇〇最大六二〇〇ニシテ平均四五〇(一立方耗中)ナリ。

遊離細胞ノ寡多ハ液体ノ肉眼的所見或ハ穿刺前ノ運動ノ如何及穿刺液量ノ寡多トノ間ニ於テ特別ナル關係アルヲ認め得ズ、僅カニ比較的疲勞ノ強キ体動ヲナセル後ノ者ニ於テ稍細胞數ノ少キ例ヲ見タルモ其ノ体動ト如何ナル關係ニ在ル哉ハ明瞭ナラズ。

滲出性肋膜炎患者ノ滲出液中ニ於ケル遊離細胞數ニ就テハ(1)上田氏ハ一立方耗中一〇〇〇乃至三〇〇〇ナルヲ常態トシ細胞像ノ固定スル時期ハ發炎第二週ナリトナシ、(2)長沼氏等ハ初回ニ於テ一九〇〇乃至三二〇〇ナルモノ最モ多ク例外トシテ五〇〇以下ノモノモアリ、經過ヲ逐フテ觀察スルニ第二回及第三回目穿刺ヨリ著シク其ノ數ヲ増加シ四〇〇〇乃至六〇〇〇或ハ之以上ニ達スルモノアリトセリ。

第 一 表

番號	姓 名	年 齡	白血球數	穿 刺 液 の 所 見	穿 刺 前 の 動 靜	左 右	穿 刺 量 (c.c.)
1	檜 物		1700	帶黃色透明	十時間行軍		0.3
2	太 田		5000	〃	〃		0.5
3	南 出		3600	〃	〃		0.4
4	西 田	22	1800	〃	八時間練兵教練	右	0.7
5	竹 下	22	4500	〃	二時間練兵教練	左	0.3
6	水 戸	22	6200	〃	〃	左	2.0
7	宮 中	22	3400	〃	銃劔術、三時間教練	左	3.0
8	谷 口	22	5900	〃	十時間戰鬪教練	右	4.0
9	石 崎	22	4900	〃	三時間演習	左	2.0
10	矢 田	22	4700	稍濁度強シ	二時間演習	左	1.0
11	酒 谷	22	4200	帶黃色透明	三時間演習	右	0.5
12	原 田	22	3500	〃	〃	右	2.0
13	島 田	23	3500	〃	營 内 勤 務	右	0.2
14	崎 田	23	2500	多少潤濁ス	〃	右	1.2
15	谷 川	23	4900	帶黃色ニシテ濁ル	〃	右	1.0
16	山 部	23	4600	〃	〃	左	1.8
最		小	1700				
最		大	6200				
平		均	4550				

是ニ依ツテ觀ルニ一般ニ初期ニ於ケル滲出性肋膜炎ノ滲出液中ニ於ケル細胞數ヨリハ所謂健康人胸膜腔液中ノソレハ稍々多キヲ見ルモノ、如シ。

三、オキシダーゼ反應

健康者胸膜腔液中遊離細胞ノ「オキシダーゼ」反應ニ關シテハ該反應ニ依リテ小淋球ト一般形態的ニ區別シ難キ小形單核細胞ヲ區別スルコトヲ得ルト説クモノ(3)池田(4)大久保(5)アルモ炎症時ニ於ケル肋膜滲出液中ノ細胞ニ對シテハ(6)上與那原氏ハ組織球ノ小數ノモノハ「ベルオキシターゼ」反應ヲ有スルモノアリト云ヒ(6)藤本氏ハ鐵「ソマトーゼ」注入ニ依ル實驗的肋膜炎ノ組織學的研究ニ際シ鐵顆粒細胞ノ「オキシダーゼ」反應ハ陰性ナルニ鐵顆粒細胞ニ貪喰セラレタル仮性「エオジン」多核形細胞ハ他ノ可染性顆粒ガ存在セザルニ拘ラズ「オキシダーゼ」反應ヲ存スト云フ。

余等ハ健康人ヨリ得タル肋膜腔液中細胞ニ就キテシユルツエ氏法ニ依リテ「オキシダーゼ」反應ヲ驗セルニ該反應陽性ナルモノ小數ニシテ大多數例ニ於テハ之ガ反應殆ンド陰性ナリキ。依ツテ余等ハ健康人胸膜腔液中ニ遊離存在スル

細胞ノ大多數ハ「オキシダーゼ」反應陰性ナル系統ニ由來スル細胞ナルモノト信ズ。

四、健康者胸膜腔液中遊離細胞ノ形態ニ就テ

一、實驗方法

先キニ記述セル遊離細胞數ヲ研究セル方法ト同様ニシテ得タル液ヲ載物——硝子ニ塗抹シ之ヲギームサ氏液ニテ適度ニ染色シテ鏡檢セリ。

該液中ニ存スル細胞ハ文獻ニ徵スルニ、肋膜被覆細胞ノ剝脫遊離セルモノ、組織球及ビ普通流血中ニ見ル白血球ナレドモ、之ガ分類ハ甚ダ困難ニシテ殊ニ之等ガ百分率ヲ求ムルハ困難ナルモ之等細胞ノ性狀ヲ文獻ニ依ツテ窺フニ

一、組織球ノ原形質ハ弱鹽基性ニシテ多數ノ大小不同ナル圓形顆粒ヲ有シ核ハ淡染色ニシテ「クロマチン網太ク核仁ハ不明瞭ナリ而シテ細胞核ハ常ニ原形質ノ一側ニ偏在シテ概ネ腎臟形乃至馬蹄形ヲ呈シ其ノ彎入部ヲ細胞體ノ中心部ニ向ケタリ。原形質内ニハ色素顆粒ノ他染色セザル分泌顆粒ヲ見ルコトアリ。亦時トシテ細胞ニ「ミトーゼ」アルコトアリ(清野)トシ、(6)上與那原氏ハ試驗管内ニ於テ「カルミン」ヲ貪喰セシメテ研索セル所ニ依レバ該細胞核ハ腎臟形乃至橢圓形ニシテ殊ニ腎臟形ナルヲ特徴トシ、時トシテ圓形ヲ呈スルモノアルモ尠ク又核ノ著シク彎入セルモノ或ハ二核ヲ有スルモノアルコトアリ。核ノ凸側ハ細胞體ノ邊緣ニ向フヲ常トシ核ノ「クロマチン」網ハ粗大ナルモ血液淋巴球及多核形白血球ノ「クロマチン」索ヨリモ小ナリト、且原形質ハ弱鹽基性ニシテ漿膜被覆細胞ヨリ淡染スト載セリ。蓋シ組織球ハ「カルミン」ヲ貪喰ニヨリテ始メテ判然區別シ得ルモノニシテ其ノ形態ニ依ルノミデハ他種細胞トノ區別ハ困難ナル記如シ。

二、肋膜被覆細胞ハ肋膜腔ニ剝離脫落スルコトアルハ當然ニシテ、之ガ個々分離セルモノハ一定時期ノ間大單核樣細胞トシテ存在スルハ現今一般ニ認メラル、所ニシテ(7)清野(8)佐藤氏等ノ著ニ見ル所ナリ。(6)上與那原氏ハ該細胞ノ核ハ原形質ノ中央ニ位シ「クロマチン」網ハ組織球ノソレヨリモ微細ニシテ其ノ大イサ二、六—二五、二「ミクロン」ヲ呈スルモノアリ原形質ハ組織球ノ夫レニ比シテ濃染スト記述シ、(9)稻村氏ハ該細胞ハ概シテ骨髓細胞ヨリ大ナル細胞ニシテ其ノ形ハ一定セズ原形質ハ大ニシテ旗ノ風ニ翻ルガ如ク邊緣多クハ不規則ナリ。然シテギームサ氏染色ニテハ淡染色性ニシテ核ハ紫赤色ヲ呈シ内部構造ハ網狀ヲナシ「クロマチン」網多クハ明瞭ナラズ。亦核仁ハ一乃至二個或ハ三個ヲ有ス。中ニハ原形質ノ尠キモノ或ハ單核性核塊トナリテ現ル、ガ如キ著シキ形態ヲ變ジ退行變性ニ陥レルモノアルヲ述ブ。

余等ハ分類上原形質ガ一般ニ濃染シ、核ノ圓形或ハ之ニ近キ形ヲナシ且細胞体ノ中央ニ位スルモノヲ該細胞ニ屬セシメタリ。

要スルニ該液中ニ存スル細胞ヲ其ノ形態ニヨリテ判然區別スルコトハ普通血液標本ニ於ケル場合ノ如ク容易ナリト言フコト能ハズ。細胞ニシテ崩壞萎縮セルモノアリ。單核細胞ニシテ小ナルモノニアリテハ小淋巴球ト混合セラル、場合多ク、之ガ判然タル區別ヲナスコト殆ンド極メテ困難ナルハ⁽¹¹⁾出井氏等モ既ニ之ヲ唱ル所ナリトス。故ニ余等ハカ、ル被覆細胞ノ定形的ナルモノ及ビ普通血液標本中ニ見ルガ如キ種々ナル多核性細胞及淋巴球(核ノ「クロマチン」網ノ粗大ニシテ核ノ周邊ニ於テ原形質ニ明庭ヲ有スル定型的ナルモノ)ヲ除キ單核性細胞ヲ凡テ大單核樣細胞トシテ一括シ、且細胞ニシテ甚シク破壞シ細胞体ノ不完全ナルモノニテ其ノ何レノ細胞ニ由來スルヤ不明ナルモノヲ不完全ナル細胞トシテ健康者肋膜腔液中ニ存スル細胞ヲ分類セムト試ミタルニ其ノ成績次ノ如シ。

二、實驗成績並ニ考案

余等ハ廿三例ニ就テ前述セル方法ニヨリテ健康者肋膜腔液中ニ遊離存在スル細胞ヲ分類セルニ被覆細胞ハ平均三・〇％(〇・七—六・九％)ヲ示シ、淋巴球ハ平均一〇・二％(〇—二九・四％)ヲ示シ、大單核樣細胞ハ平均五三・七％(三四・三—七五・二％)ヲ示シ、細胞ニシテ不完全ニシテ破壞シツ、アルモノハ平均二九・五(一〇・八—八〇・〇％)ヲ示セリ。多核形白血球ニ於テハ中性嗜好性細胞最モ多ク含有セラル、モ「エオジン」嗜好細胞及ビ鹽基嗜好性細胞ハ甚ダ少シ。(第二表參照)

余等ノ成績ヲ⁹⁾稻村氏ノ輕症型肋膜炎トシテノ研究報告ニ比照スルニ淋巴球ノ百分率ニ於テハ甚ダ接近セリ。(稻村氏ハ平均一二・五％トナセリ)、余等ノ被覆細胞ト見做セルモノト大單核樣細胞トノ和ハ稻村氏ノ内被細胞ト組織球トノ和(五五・七％)ニ良ク接近セルヲ見ル。

次ニ更ニ詳シク余等ガ各種細胞ニ付キテ觀察セル所ヲ記載セント欲ス。

(一)、肋膜被覆細胞 該細胞ヲ判然區別スルハ甚ダ困難ナル所ナリトスルモ、前述セルガ如クシテ之ノ百分率ヲ觀ルニ僅カニ平均三・〇％ニシテ、稻村氏等ノ一九・三％ニ比シテ低キ價ヲ示セリ。其ノ大イサハ、 $16.0 \times 10.1 \mu$ 、 $14.4 \times 13.0 \mu$

第 二 表

番號	姓 名	性	年 齡	肋膜被覆細胞 (%)	淋巴球 (%)	大單核樣細胞 (%)	中性多核形細胞 (%)	エオジン嗜好性細胞 (%)	塩基嗜好性細胞 (%)	不完全ナル細胞 (%)	穿 刺 液 ノ 肉 眼 の 所 見	穿 刺 前 ノ 動 靜	左 右 別	穿 刺 液 ノ 量 (c.c.)
1	大 倉	♂	22	1.9	12.1	65.0	1.4	—	—	19.6	帶黃色透明	二時間教練	右	2.0
2	横 井	♂	22	4.9	2.5	34.3	2.4	—	—	55.9	漿液性透明	〃	左	2.0
3	南	♂	22	3.4	9.2	75.2	1.0	—	—	11.2	〃	二時間演習	〃	0.5
4	清 水	♂	22	2.9	29.4	55.4	—	0.8	—	11.4	〃	〃	右	2.5
5	高 山	♂	22	4.8	2.4	47.3	1.0	—	2.4	42.1	〃	一日中行軍		
6	崎 田	♂	22	2.6	4.3	44.0	3.8	—	—	45.3	〃	三時間野外演習	右	2.0
7	西 田	♂	23	4.0	14.4	68.0	2.5	—	—	11.1	漿液性透明	二時間野外演習	〃	0.2
8	木 戸	♂	22	5.7	6.2	52.1	18.0	—	—	18.0	帶黃色透明	〃	〃	1.0
9	吉 田	♂	22	0.7	10.8	52.8	2.5	—	—	33.2	漿液性透明	銃劍術及二時間野外演習	〃	1.2
10	大 和	♂		5.0	—	15.0	—	—	—	80.0	〃	一日中行軍	左	3.0
11	宮 中	♂	22	1.0	7.6	55.6	1.3	—	—	34.0	多少潤濁ス	二時間野外演習	〃	
12	上 田	♂	22	5.6	2.6	52.0	8.6	2.2	—	29.0	漿液性透明	一日中行軍及教練	右	0.2
13	竹 下	♂	22	2.5	9.8	34.7	0.5	0.5	—	52.0	〃	二時間野外演習	左	0.3
14	原	♂	22	1.9	6.3	60.2	0.5	—	—	31.0	〃	三時間野外演習	〃	2.0
15	石 井	♂	22	2.0	10.2	53.8	—	—	—	34.0	〃	二時間野外演習	右	0.3
16	山 部	♂	23	3.5	10.2	63.7	1.8	—	—	10.8	漿液性ナルモ多少潤濁ス	〃	左	0.1
17	山 部	♂	23	6.9	15.1	65.0	1.3	0.9	—	10.8	〃	〃	右	1.8
18	谷 川	♂	23	2.3	19.1	54.6	2.3	—	—	21.7	〃	〃	左	1.2
19	坂 谷	♂	22	4.6	12.0	55.8	—	—	—	27.6	漿液性透明	三時間野外演習	右	0.5
20	石 崎	♂	22	3.4	4.7	50.4	3.4	—	1.3	36.8	〃	〃	左	2.0
21	島 田	♂	22	1.3	17.6	65.7	—	—	—	15.4	〃	〃	右	0.5
22	矢 田	♂	22	1.3	22.2	53.4	0.9	—	—	22.2	〃	〃	左	1.0
23	谷 口	♂	22	6.3	7.2	61.1	—	—	—	25.4	漿液性ナルモ多少潤濁ス	六時間戰闘教練	右	4.0
最 最 平			小 大 均	0.7 6.9 3.0		15.0 75.2 53.7				10.8 80.0 29.5				

14.4×18.5 μ (多角形ナルモノハ最モ長キ軸ト最モ短キ軸トヲ示シ圓形或ハ之ニ近キモノハ長軸ト之ニ直角ニ交ル最モ長キ軸トヲ示ス、以下凡テ之ニ準ズ) 大ナルモノ最モ多シ。⁽¹²⁾ 吉駒氏ハ内被細胞ノ形態及ビ大サ或ハ排列等ハ梁材ノ發育ト共ニ不同不規則トナル、下等動物ヨリ高等動物ニ進ムト共ニ及ビ幼若ヨリ成熟ニ向フト共ニ梁材發育漸次盛ントナリ内被細胞ノ形態、大サ、排列等之ニ伴ヒテ複雑トナリ、内被細胞ノ炎症ニ際シテ脱落セルモノハ漸次退行性變化ニ陥リ脱落後死滅スルモノト思惟スルヲ至當ナリトノ見解ヲ有ス。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾ 近藤氏モ之ト略同様ナル研究ノ結果ニ到達シ更ニ人類ニ於テハ幼年ヨリ成人ヲ通シテ大差ナク其ノ大イサ10×24 μ ナルモノ最モ多ク屢々24×32 μ ナルモノアリ然レドモ老年ニ至レバ不規則トナリ10×15 μ 大ニ達スルモノアリト報告セリ、更ニ氏ハ生体染色ヲ應用セル實驗的肋膜炎ノ病理組織學的研究ニ於テ發炎後二時間後ノ滲出液中ニ肋膜被覆細胞ノ遊離セルモノ最モ多シトナセリ、是ク發炎後短時間内ニ被覆細胞ノ多キハ一般ニ認メラル、所ニシテ清野氏ノ著書ニ於テモ亦見ル所ナリ。

是ノ如ク被覆細胞ハ健康組織ニ於テモ既ニ其ノ大イサニ多少ノ差違アルガ如ク、亦炎症時其ノ初期ニ於テ該細胞ノ多キコトハ先進ノ認ムル所ナリ、「余等ハ健康人胸膜腔液中ニ存在セル該細胞ハ百分率ニ於テハ大ナル數値ヲ示サズ、且ツ其ノ大イサニ於テモ一般ニ未ダ遊離セザル健康組織中ノ細胞ニ比シテ倭小ナルモノト思惟ス。

(二)、大單核樣細胞 種々ナル炎症ニ際シテ滲出液中ニ組織球ノ遊走スルハ文献ノ示ス所ナリ、余等ハ健康人胸膜腔液ニ存スル細胞ノ大部分ハ大單核樣細胞ナルコトヲ知レリ、該細胞ノ大部分(八〇%以上)ハ組織球ナルコトアリト云フモノアルモ肋膜被覆細胞ト組織球トヲ形態的ニ區別スルハ困難ナルコトナレバ余等ハカ、ル細胞ヲ大單核樣細胞トシテ且大單核細胞ノ「ゲネーゼ」ノ確定セザル今日余等ハ敢テ之ヲ區別セザリキ。

然シテ該細胞ニ屬セシメタルモノハ大イサ14.4×11.2 μ 、8.0×8.0 μ 或ハ24.0×24.0 μ ナルモノ多ク、全細胞ニ對スル比率ハ平均五三・七%ヲ示セリ。之等細胞ノ形態ハ大体實驗方法ノ項ニ於テ述ベシ所ナルモ更ニ之ノ群ニ屬スル細胞ノ種々形態ニ就テ聊カ詳述セント欲ス。

一、原形質内空胞ヲ有スルモノハ此ノ種細胞ニ最モ多ク⁽¹¹⁾吉馴氏モ滲出液中ノ組織球ハ 12.7—18.0×20.4 μ ニシテ原形質内ニ空胞多キモノアリ中ニハ核ノ裸出セルモノアリト報告セリ、⁽¹⁴⁾Walther Gloor ハカ、ル細胞ノ空胞ハ、ギ—ムサ氏色素ト親和力弱キ物質ノ存在ニヨルトナシ種々ナル中毒ニヨリテカカル物質ノ存在ヲ惹起セシムルモノナリトノ見解ヲ有ス、此ノ空胞内ニ滿サル、物質ノ如何ナルモノナル哉ハ尙研究ヲ要スル所ナルモ、健康者ヨリ得タル肋膜腔液中ノ大單核様細胞ノ大部分ハ多少或ハ大小ノ空胞ヲ有スル事ハ事實ニシテ、之ガ如何ナル意義ヲ有スルヤハ明瞭ナラザルモ、余等ハ恐ラク種々ナル要約殊ニ「メヂウム」ノ如何ニヨリテ左右シ得ラル可キ細胞死滅崩壊ノ一過程ナルベシト思惟スルモノナリ。

二、貪喰作用⁽²⁵⁾Monckeberg ハ貪喰作用ヲ有スル單核遊離細胞ト肋膜被覆細胞トハ區別シ得ザル場合アルヲ以テ滲出液中ノ被覆細胞ノ機能ヲ確證シ得ザルモ恐ラクハ貪喰作用ノ存スルモノナラント思惟シ、⁽³⁾Leuchs ハ肋膜炎患者ノ滲出液中ニ於ケル被覆細胞ニ屢々貪喰作用アルヲ認ムルヲ得タト確言シ、⁽⁹⁾Marchand ハ被覆細胞ハ遊走細胞トシテ盛ニ貪喰作用ヲ營ミ所謂巨大貪喰細胞ノ一部分ヲ形成スルモノナリト云ヒ、⁽¹⁷⁾v. Brunn ハ白血球ハ炎症ニ際シテ自動的ニ被覆細胞ノ空胞中ニ侵入スルモノニシテ、終ニハ榮養障礙ノ爲メ自ラ破滅ノ運命ニ陥ルモノナリトノ見解ヲ有ス。是ノ如ク果シテ自動的ナルヤ他動的ナルヤハ即斷スルコト能ハザルモ健康人肋膜腔液中ノ大單核様細胞ニシテ多核性白血球或ハ核塊ヲ胞体内ニ閉塞シ恰モ之等ヲ貪喰セルガ如キ觀ヲ呈スルモノアルヲ認ムルコトアリ。

三、印環細胞 一九〇八年⁽¹⁸⁾Sadelmann ガ該細胞ガ癌腫性滲出液ニ特有ナルモノトシテ報告セルモ⁽¹⁹⁾澤野氏及ビ⁽²⁰⁾小林氏等ニ依レバ該細胞ハ滲出液中ニハ存セザルモ獨リ癌腫性ノモノノミナラズ滲出液中ニ存スルモノニシテ小林氏等ハ更ニ其ノ原因ハ遊離細胞ノ原形質内ニ水分ヲ攝取シテ膨化セルモノナリトセリ。

余等ハ健康人肋膜腔液中ニモ屢々該細胞ヲ認メ其ノ細胞体ハ 24.0×24.0 μ 大ニ膨化セルモノアリ核ハ甚ダシク原形質ノ周邊部ニ押シヤラル、モノアルヲ觀タリ。⁽⁴⁾大久保氏ハ健康人ノ肋膜腔液中ノ蛋白質含有量ハ二五—三〇%ナリ

トシ⁽²¹⁾中瀬氏ハ一〇—三〇%ナリトナシ⁽²²⁾古川野田氏ハ一四七—三三五ナリト報告セラル。余等ハ健康人肋膜腔液中ニ該細胞ノ存在スルハ蛋白質其他種々ナル鹽類ノ含有量⁽²³⁾(山田等)ニ關係ヲ有シ該細胞ノ存在スルモノナラント信ズ。

四、健康者ヨリ得タル胸膜腔液中遊離細胞ニ於テモ極メテ稀レニ「ミト—ゼ」アルヲ認メタリ。

(三) **不完全ナル細胞** 興味アルハ該液中ノ細胞ニ於テ細胞ノ次第ニ破壊シテ原形質ヲ失ヒ核ハ次第ニ裸出シテ遂ニ Scholle トナルニ至ル種々ナル状態ヲ見出スコトヲ得ルコトナリトス。余等ハ該液中ノ細胞ニシテ自ラ遊走力ヲ有シテ組織中ニ浸入スルコトヲ得ルモノノ他ハ凡テカク Scholle トナリ次第ニ破碎融解スルモノナラント信ズ。斯ク該液中ニ浮游スル細胞ノ殆ンド大部分ノモノガカ、ル運命ニ陥レルモノトセバ既ニ核塊トナレルモノニ於テハ果シテ如何ナル細胞ヨリナレルモノナリヤハ全ク不明ニシテ區別スルコト能ハズ。即チ余等ガ不完全ナル細胞トシテ區別セル所以ナリトス。

カ、ル群ニ屬セシメタルモノハ全細胞中平均二九五%ナリキ。大部ハ核ノ裸出セルモノニシテ稀ニハ多少ノ原形質ヲ具備セルモノアルト雖モ尙ホ他ノ細胞ト區別判然セザルモノナリ、核ノミトナリシモノハ更ニ膨化シテ其ノ大イサ $12.8 \times 9.6 \mu$ 或ハ $12.8 \times 12.8 \mu$, $14.4 \times 9.6 \mu$ トナレルモノアリ。或ハ破碎シテ小塊トナレルモノハ $5.6 \times 3.4 \mu$ トナレルモノアリ。斯ク該液中ニ脱落セル細胞ハ小塊トナリテ貪喰セラル、カ或ハ融解シテ吸收セラル、モノト思惟スルヲ妥當ナリト信ズ。

(四) **淋巴球** 該液中ニ於テハ流血中ニ見ルガ如キ淋巴球ヲ看ルコト甚ダ少ク、余等ハ僅カニ全細胞中平均一〇—二%ニ於テ見タルノミナリ。之レ稻村氏ノ輕症型肋膜炎肋膜腔液中ニ於ケル平均率ニ略一致セル成績ナリ。而シテ稻村氏ノ普通型肋膜炎滲出細胞中平均五五三%及ビ上田氏ノ八〇%以上ニ存在スルモノ全例ノ七割以上ナリト報告セルニ比シテ甚シク低率ヲ示セリ。

(五) **多核形白血球** 普通炎症ノ初期ニ於テハ中性多核形細胞ノ多キヲ見ルモノトセラル、モ余等ノ遭遇セル健康人

肋膜腔液ニ於テハ多シトナス可ラズ、即チ中性多核形細胞ハ他種多核形細胞ニ比シテ最も多ク全例中一八例ニ於テ〇・九乃至一八％ニ之ヲ見出シタリ、鹽基性細胞ハ更ニ少ク二十三例中僅カニ二例ニ過ギズ、「エオジン」嗜好性細胞ハ時ニ甚ダ高キ百分率ニ於テ存在スルコトアリト云フモノアルモ余等ハカ、ル例ニ遭遇スルヲ得ザリキ。然シテ二十三例中僅カ四例ニ於テ〇・五乃至二・二％ニ之ヲ見出シタルノミナリ。

五、總括

余等ガ前述セル所ヲ概括セバ、健康人ニ於テ穿刺抽出シ得ル胸膜腔液中ニ存在スル細胞數ハ一七〇〇乃至六二〇〇平均四五五〇（一立方耗中）ニシテ文献ニ見ル肋膜炎滲出液中ノ細胞數ニ比シテ其ノ平均數ハ稍高キガ如シ、尙之等細胞ノ大部分ハ「オキシダーゼ」反應陰性ナル系統ニ由來スルモノノ如ク、之等細胞ノ中大單核様細胞最も多ク（平均五三・七％）退行變性ヲ示シ細胞体ノ不完全ナルモノ、或ハ核塊ノミトナレルモノ之ニ次ギ（平均二九五％）、流血中ニ見ルガ如キ淋巴球ハ更ニ少ク（平均一〇・三％）多核形白血球ハ前者ニ比シテ甚ダシク僅少ナリ、然シテ之等多核形白血球ノ内中性多核形白血球ノ存在ヲ最も多ク認メタリ、更ニ之等細胞ノ形態及各種細胞ノ百分率等ニ就キテ考察スルニ炎症性滲出液内細胞ト健康者ヨリ得タル胸膜腔液内細胞トノ間ニ多少ノ相違ヲ認メ得タリ。

本研究ニ就キテハ第七聯隊醫務室諸賢ヨリ種々御便宜ヲ賜リタルト共ニ山田教授及ビ杉山教授ヨリ種々御高教ヲ與ヘラレタルニ對シ謹ミテ謝意ヲ表ス。尙本稿ハ本誌印刷所類焼ニ際シ全部焼失セルヲ以テ再稿セシモノナリ。

文獻

- 1) 上田春太郎：帝國海軍ニ於ケル胸膜炎ノ研究（第一報）海軍胸膜炎ト結核、結核第六卷、第六號（昭和三年六月）六八〇頁
- 2) 櫻沼、廣野、關口：肋膜炎滲出液ノ研究、結核、第六卷、第五號、596頁
- 3) 池田：東京醫學會雜誌、第二十七卷、17號 文獻 1.ニ據ル
- 4) 大久

- 保九平：健康体ノ肋膜炎ニ就テ、東北醫學會雜誌、第六卷(大正十一年)、305頁 5) 上野那原朝珍：試験管内生体染色法ヲ以テセル人体漿膜腔液細胞ノ研究、海軍々醫會雜誌、第十五卷、第一號(大正十五年三月) 6) 藤本村平：實驗の肋膜炎ノ組織學的研究、東京醫會雜誌、第四十一卷、第六號 7) 清野謙次：生体染色研究ノ現況及其ノ検査術式特ニ生体色素攝取 附組織球性細胞誌、大正十年、480, 712-480—485頁
- 8) 佐藤清：實驗血液病學、150頁 9) 稻村元一：肋膜炎患者穿刺液ノ細胞像ニ就テ、軍醫團雜誌、第一五五號(大正十五年五月)
- 10) 佐藤成四郎：日本病理學會雜誌、第五卷、大正五年、文部5、三據ル 11) 出井淳三：軍隊胸膜炎研究ニ關スル管見、第138號(大正十三年) 1051頁 12) 吉野信安：家兎胸膜内被細胞ガ其ノ實驗的胸膜炎ニ對スル態度ニ就テ並ニ脊椎動物脊髓膜内被細胞ノ組織學的研究、京都醫學會雜誌、第十七卷、第二號、163頁 13) 近藤見長：生体染色ヲ應用セル實驗的肋膜炎ノ病理組織學的研究、日本微生物學會雜誌、第十七卷、191頁(大正十二年) 14) Walther Gloor Die Klinische Bedeutung der qualitativen Veranderungen der Leukoocyten. 1929 Leipzig S. 2—4
- 15) Leucks; Über die Zellen des menschlichen Eiters und einiger seröser Exsudate Virchow's Archiv Bd. 177, S. 28. 1904. 16) Marchand; Ueber die bei Entzündungen in der Peritonealhöhle auftretenden Zellform. Verhandl. I. Deutsch. Path. Gesellschaft S. 63. 1898. 17) V. Brunn Ueber die Entzündung seröser Häute mit besonderer Berücksichtigung der Rolle der Serosa-Deckzellen. Ziegler's Beiträge. Bd. 30 S. 417, 1901.
- 18) Stadelmann; Zur Diagnose der Meningitis carcinomatosa Berl. Kl. Wochenschrift 1908 S. 2262. 19) 澤野哲三：所謂ソーゲルリョウク細胞ノ多數ヲ含有セル腹水ヲ伴ヘル蠟毒性肝硬變症ノ一例ニ就テ、臨床、第一卷、第三號、1924年 20) 小林義雄：胸腹水中ニ於クル印選細胞ニ就テ、臨床醫學、第十三年第九號(大正十四年九月) 21) 中瀨眞亮：第二十八回北陸醫學會雜誌(昭和三年十月) 22) 古川利雄、野田九郎：健康人胸腔液及脚氣其ノ他ノ浮腫疾患ニ於クル胸腔漏出液ニ就テ、日新醫學、第十四卷、951頁(大正十二年) 23) 山田、谷野、吉本、長谷川、高橋、眞田：胸腔内ニ於クル健康並病の漿液ノ性状異同ニ就テ、日本內科學會雜誌、第七卷、第二號 24) 近藤見長：脊椎動物ノ肋膜被覆細胞ノ形態學的研究、日本微生物學會雜誌、第十七卷、93頁 25) Münckeberg; Über das Verhalten des Pleuroperitonealepithels bei der Einheilung v. Fremdkörpern. Ziegler's Beiträge. Bd. 142. S. 327. 1875.